占領に負けない研究

2014年2月、パレスチナ自治区ナーブルスのアン・ナジャーハ大学（以下、ナジャーハ大学と記す）の図書館を訪ねた筆者は、案内された書庫の前で、思わず絶句してしまった。

しばしば受けるというイスラエル軍による検閲のため、書庫はおそろしく雑然としており、整理すらされていなかった。ここに置かれているのは、イスラエル建国以前のパレスチナで発行された書物が中心である。アラブ／パレスチナ・ナショナリズム研究や、20世紀前半のパレスチナ史研究をおこなうには必要不可欠な資料ばかりで、検閲対象となるのはそれが理由なのだが、整理されないまま放置されているとはすなわち、これらの資料がまったく閲覧されていないということを意味していた。

このとき筆者が探し出したのが、パレスチナのジャーナリズムの父と呼ばれるナジーブ・ナッサールの最初の著作にして代表作、『シオニズム』である。ナッサール自身が立ち上げたパレスチナ初のアラビア語紙、『アル・カルメル（以下、カルメル紙）』の連載記事をまとめたもので、シオニズムを扱った史上初のアラビア語書籍である。シオニズム成立の歴史を簡単に解説し、土地買収によってパレスチナを「浸食」するシオニズムの危険性に警鐘を鳴らしている。ナッサールの主張は、当時シオニスト入植者に農地を買収された村の援助活動をおこなっていた彼自身の実体験に基づいており、「土地を守ること」の重要性を訴えている点において、100年後の現在のパレスチナ・イスラエル紛争を予見した書物といえよう。「パレスチナ人」という単語は登場しないが、その後のアラブ／パレスチナ・ナショナリズムの萌芽がここにみられる。

カルメル紙を創刊した1908年から亡くなる1948年まで、ナッサールはジャーナリズムの第一線に立ち続け、膨大な量の記事やエッセイ、書簡を残している。ところが彼の著作を読める場所は数えるほどしかなく、著者本人についての研究もほとんど進んでいない。『シオニズム』すら冒頭で触れたナジャーハ大学で閲覧できるのみであり、当然デジタル化もなされていない。カルメル紙を所蔵している図書館もごく一部であり、保存状態はいずれも劣悪である。唯一カルメル紙の完全なコレクションを所蔵するパレスチナ側のベツレヘム大学では、イスラエル製の機材の生産終了にともない、貴重なマイクロフィルムが閲覧できない状態に陥っている。

イスラエル北部・ナザレの東方正教の受胎告知教会。1948年、イスラエル建国直前に亡くなったナッサールはこの近くにある東方正教の墓地に眠っている（2014年8月26日）。

「パレスチナの現状が停滞している今だからこそ、アラブ・ナショナリズム研究は基本に立ち返る必要があるが、残念ながら関心が払われていない」と、ベツレヘム大学のコスタンディ・ショウマリー教授は語る。カルメル紙のコレクションを大英博物館から入手し、膨大な執筆者・記事目録を作成したのは彼であるが、その研究成果は次の世代に生かされていない。ナッサールが黙殺される理由としては、彼の宗教的マイノリティ（キリスト教徒）としての出自や、実はレバノン中部出身で純粋なパレスチナ人ではないこと（実際、彼は『シオニズム』の中で「パレスチナ人」という単語を使わない）、さらにはイギリス委任統治時代にパレスチナ・ナショナリズムのシンボルとなったエルサレムの名望家たちとは相容れぬ存在であったことが挙げられる。同僚であった妻が過激な反英活動家であったため、研究者はむしろ、彼女のほうに注目してきた。シオニズムや植民地主義と対抗するため、パレスチナの地場産業、ことに農業を発展させるべきだというのが、ナッサールの終生変わらぬ主張であった。派手な演説で民衆を惹きつける指導者を好むアラブ人にしてみれば、彼の活動は地味であり、物足りなくうつるのは確かである。しかしながら、彼の主張は今日の研究者や現地で活動するNGO, さらには地元の人びとの主張と合致し、ナッサールの活動は今後のパレスチナ社会の指針となりうる。また、ショウマリー教授の作成した執筆者目録からは、ナッサールが地域を超越したアラブ・ナショナリストの人脈を持っていたことがうかがえる。筆者はまだナッサール研究の入り口に立ったばかりであるが、彼の著作をひもとけば、より広い視野でのアラブ／パレスチナ・ナショナリズム研究が可能となるであろう。

近年、パレスチナ自治区では過去の遺産を次世代に継承させようという動きが顕著であり、それは近年の博物館建設ラッシュにもあらわれている。しかしながら、地方の有力者であるコレクション所有者の意向を重んじるあまり、観光客など訪れるはずもない僻地に豪華な施設を作ったり、オープニングセレモニーを派手におこないながらも中身は空っぽだったりと、眼高手低の傾向が著しい。それらの原因はイスラエルによる占領にあり、占領が現地の人びとの生活のみならず、パレスチナ研究にも悪影響をおよぼしている。しかしながら、占領という現状に屈しない研究こそが、今のパレスチナには必要なのではなかろうか。

パレスチナ自治区のベツレヘム郊外にある私設博物館。創設者の名を取って、「ムラード城」と名付けられた博物館の展示は充実しているものの、アクセスが悪いため訪れる者は少ない（2014年8月6日）。

文・写真　菅瀬晶子

国立民族学博物館研究戦略センター准教授。専門は文化人類学、中東地域研究。著書に『イスラエルのアラブ人キリスト教徒』（渓水社 2009年）、『イスラームを知る6　新月の夜も十字架は輝く──中東のキリスト教徒』（山川出版社 2010年）などがある。